本物でないと——子どもと典礼③

ある集まりで、どうしてミサに参加するのか、という話題になったことがある。「義務だからミサに行く」という考えが大半で驚いたことがある。「喜んで来る人もいる」というと「えっ、喜んで来る人がいるんですか！」という反応に二度驚いた。

「次の世代に信仰を伝える典礼での取り組みはどのようにしていますか」と尋ねられたことがある。特別なことはしていない。信仰の根本は、神がともにいてくださるということを感じること。それは典礼の場で体験できる。イエスと弟子たちの最後の晩さんに起源をもつミサは二〇〇〇年の歴史をもつ。この長い時間を経て伝えられたことを表す「型」は貴重なもの。子どもであれ、大人であれ、ミサの中にある普遍的な真実は伝わるはず。

わたしがより意識して取り組んでいるのは「型」を大事にしながらも、なによりも「心」や「気持ち」を大切にすること。心、気持ちが伴わない型は偽善となる。子どもたちは、それが真実であるか、うそであるか見抜く力を持っている。子どもを典礼の場から遠ざけて大人中心の典礼をしていくと偽善となる恐れが常に伴う。心、気持ちを大切にすると、言葉がはっきりとして意味が伝わり、動作がヤラセではなくて美しくなる。子どもたちはミサや典礼において、なによりも「本物」に触れることで神に触れることになる。ミサで行われることが、ただの役目ごなしのようになったり、義務的な気持ちで行われることは、絶対に避けなければならない。司祭も含めて、信徒も。

（山元眞・福岡教区司祭）